



男は 痛い !

國友万裕

第32回

『天気の子』

1. 久しぶりにアメリカ旅行

その日は大阪でナッシュビル・ツアーの打ち合わせだった。

実は、この夏休み、久々にアメリカに行くことになったのだった。大学で英語を教える身でありながら、俺はほとんど外国に行っていない。お金がないし、飛行機は嫌いだ、心配性なので家を空けるのが怖い、そもそも旅行するのがあまり好きではない、重いスーツケースを抱えて、知らない街を観光したいとは思わない、他のことにお金をかけたいと思ってきた。

しかし、今回は運命的な出会いだった。去年、大学で講師をされているプロテスタント系の牧師さんと知り合い、その先生が毎年行われているツアーがあるとのことで、とんとん拍子に話は進んだ。場所はアメリカのテネシー州ナッシュビル。俺は、アメリカは西海岸には行ったことがあるが、南部には行ったことがない。南部といえば、人種差別の地だが、アメリカの古い時代が今でも残っているところだ。本当のアメリカに出会うことができるかもしれない。しかも、南部の牧師さんの家族たちと交流できる。美味しい料理も作ってくれるだろう。プールパーティもあるらしい。南部の人は親切だと聞いているし、サザンホスピタリティを味わいたい。そういう気持ちになった。学生たちも参加するツアーなので、費用も格安である。飛行機の中の時間も合わせて9日間なので、向こうでの小遣いも、日本円にしてせいぜい5万円くらいしかかからない。これは行かない手はないのだ。

その日は、参加者10人を集めてのオリエン

テーションだった。シニアは牧師さん二人と俺の3人。他は若い女の子、男の子である。まだ10代の大学生が多い。瑞々しいなあー。俺はオリエンテーションを受けながら、35年前初めてアメリカに行った時のことを思い出していた。1回生と2回生の間の春休み、1ヶ月間、大学の生協が主催しているホームステイプログラムに、俺は親の脛をかじって参加したのだった。

2. 学歴自慢を聞かされ続けた1ヶ月

あの時の俺は相当焦っていた。立命館大学に入学しての最初の一年間は全てが不本意に終わっていた。今思えば、高校にも行かず、引きこもっていた俺が大学生活にすぐに溶け込めるはずはなかった。やることなすこと裏目に出た。俺は前向きに頑張ろうと思っていたのに、それを挫かれるようなことが何度起きたことだろうか。あの当時、幸運の女神は完全に俺に背を向けていたのだった。

その時のホームステイプログラムは、ロサンゼルス郊外のホストファミリーの家に滞在しながら、昼間は世話役の先生たちとともに勉強し、他の日本人学生たちとともにディズニーランドやユニヴァーサル・スタジオなどを回っていくというものだった。俺にとって、このツアーに参加することは大きな賭けだった。初めての海外旅行だったし、ましてホームステイということになれば、滞在先の家族とうまく行くのかという心配は大きかった。しかし、それまでの自分から脱皮するためにはその不安を払い落とさなくてはならない。その気負いだけでアメリカに向かった。ところが、ここで待っていたのは、アメリカ人家族

とのトラブルではなく、日本人たちからのイジメだったのである。

俺はいじめられキャラだ。オドオドして、すぐに傷つく性格だ。あいつはイジメやすい、からかいやすいという目で見られる。ましてあの当時の俺はまだ引きこもりから脱却し始めたばかりの頃で、社会性も社交性も全くなかった。俺たちの滞在地区の日本人学生のグループは男女比では女性が6人、男が俺を入れて4人。他の3人の男子は東京の大学の連中で、女子たちは全て関西系だった。3人の男たちも俺からすれば嫌なやつ。しかも、3回生で、1回生は俺だけ。散々、いじめられることになった。そのトラウマについてはまたの機会に書くとして、今回問題にしたいのは、この時一緒だった関西の某国公立大学出身の女子である。

彼女は今、どこで何をしているだろう。結婚して、子供を産んだとしたら、きっと教育ママだったろうなあ。そして、おそらく、神様は彼女を戒めるために、彼女の子供たちが希望の大学には入れない罰を与えたのではあるまいか。彼女の学歴至上主義はほとんどハラスメントだった。アメリカでの1ヶ月、俺たちは、ほぼ毎日、同じ場所に集められ、簡単な英語のレッスンを受けていたのだが、この彼女、自分がいい大学に行っているという意識を持っているので、毎日のように大学の話をしたがるのだった。「私立大学の場合は、慶應や早稲田であっても、中学くらいから付属校入って金積んでいけば入れるんだもの。私たちはちゃんと共通一次受けて・・・」のようなことを露骨に言うのだ。

ちなみに彼女の通っていた大学は、最高峰の偏差値のところではない。関西では有名だ

が、他の地方での知名度は低い大学だ。俺だって、こんな大学があるということを関西に来るまで聞いたこともなかった。それまで、大都市圏の私立大学に憧れていた俺は、関西に来て、国公立志向の強さに愕然としたものだった。俺たちの頃は、国公立は7科目勉強せねばならず、加えて、国公立は学費が安いから、私立のいいところに受かっている国公立を選ぶ学生は多い。そのプライドがあるからなのだろうけど、ここまで無邪気に学歴自慢していたら、あんたの方が性格疑われるでしょう？と言いたくなった。でも、彼女は、自分の単細胞さに気づいていなかった。

彼女は、東京の大学から来た男子たちに関西の大学のことをあれこれ話し始めた。東京の人たちは立命館といっても特別なイメージは持っていない。その彼らに彼女は、「あの大学は暗いの(笑)」と冗談めかして言いはじめた。そして、その1ヶ月、俺は、ずっと「暗い大学に行っている暗い人」というレッテルを貼られ続けることになったのだ。彼女の話術はいやらしかった。彼女は、立命館がレベルの低い大学、勉強のできない大学とは言っていない、暗い大学と言っている。「暗いのが悪いとは言っていないでしょ？」という態度をとりつつ、彼女は明らかに立命館を見下している。「あなたの大学なんて、私の大学に比べれば・・・」という気持ちをちらつかせながらも、冗談めかして言えば、こっちは本気で怒ることはできない。怒るあんたの方が、冗談が通じない野暮な人ということになる。そのことを計算に入れた上で、ネチネチ、嫌なことを言っていくのだった。

今振り返れば、80年代は、名門大学に入ったやつはこれで一生安泰というパスポートを

受け取ったような気分だったのだろう。今となっては、大学の偏差値は流動的で、国公立大学でも相当入りやすくなっているところはある。ちなみに彼女の通っていた大学も昔に比べれば相当株は落ちたはずだ。しかし、当時の俺たちはそんな未来が待っているなんて思わない。当時の受験は過酷だったから、大学に入ろうと思ったら本腰で勉強せざるを得ず、大学に入れば自慢できる、優越感に浸れる、天狗になれるという欲望を支えにしなければ、受験を乗り越えることはできなかったと思う。高校の先生たちも乗り越えた奴が偉い奴という意識を刷り込ませないことには、受験校の教師は務まらない。そういう時代だったのだ。

俺たちの頃は『ふぞろいの林檎たち』という山田太一のドラマが人気だったが、これは東京の小さな大学に通う男子学生たちの学歴コンプレックスをテーマにした物語だった。最近はそのような学歴社会を揶揄したようなドラマはあまりないような気がする。今の学生たちが学歴問題をどう捉えているのか、実情は俺にはよくわからない。残念ながら知る由もないのだ。最近は大学の入り方が多様化しているので、昔ほどには学歴自慢はなくなっているのだろうか。

3. 俺はラグーマン

「ラグビーとか、柔道やっていましたか」

7月のある日、俺の体を触りながら、鍼灸院の先生は言った。10年ほど前にお世話になっていた鍼灸の先生は当時30代だったが、その先生からも同じことを言われたことを思い出した。前に出版社の人からも言われたなあ。

学生からも言われた。

「いや、やっていないですけど」

「でも、スポーツは何かなさっていませんでしたか」

「大人になってから、プールに通ったくらいですかねー」

俺は運動神経ゼロなのに、なぜか、体軀はラグビーや柔道に見られる。身体つきは子供の頃からごつかったのだが、若い頃は見るからに鈍いタイプのやつだということはすぐに見抜かれていた。男の子にとって、スポーツ問題は重大な問題である。スポーツができない男子はカーストの下に置かれてしまうため、周りの男子たちとも対等な関係が築けないのだ。今でもスポーツができなかったことを他人に話すことは辛い。忌まわしい思い出を他人に話すことは苦痛でしかない。この問題は俺の中で大きくのしかかっていた。俺が万が一自分の子供を持つ、とりわけ男の子を持つなんてことになったら、俺の遺伝子を受け継ぐ子は何よりもスポーツ問題で苦勞するだろう。想像しただけで、可哀想になる。俺は、結局、子供を持つことなく、一生を終えることになることは確実だ。子供の数を増やすためには、様々な資質の子を受け入れる体制を作らないことには、親になるやつは安心して子供はつくれないんだよーというのが俺の主張だが、普通の人はそのままで大きな悲しみは経験していないから、そこまでは考えない。

治療を受けながら、色々な思いが駆け巡っていった。毎年のことなのだが、5月の下旬から7月は殺人的な忙しさだ。半年くらい前から五十肩でプールでバタフライができなくなり、その上、首まで痛くなった。原因ははっきりしている。俺は普段が右手で黒板に字を

書いているので、右と左がアンバランスである。それで体調が悪くなるのだ。やはり歳だから、できる限り、体を庇いながら仕事をしていかななくてはならない。

そこは、今年の春定年になられたある先生から勧められた鍼灸院で、院長先生は、その定年の先生と同じ年だから71歳で、赤ひげみたいな雰囲気の人。この先生、ずっと生涯現役を貫くつもりなのか。俺も70代まで現役を貫けるかなあー。医者だとそういう人が多いけど、いつ死ぬかわからない年齢になって、仕事をしていくというのはどういう気持ちなのだろう。俺だったら、晩年になったら、現役を離れて、ゆっくり自分の人生を振り返ることを選ぶのではないか。

この先生の前ではかつてはラグーマンだったという自分を演出してみようか。ラグビー体形に見られることは悪い気はしない。俺自身もラグビーしている人に憧れるからだ。五郎丸なんてカッコいい。俺は男っぽい仕草や態度をあえて取ることに決めた。どっちみち、この先生は俺の過去のことなんて知らないし。先日、『なぜ私は一続きの私であるのか ベルクソン・ドゥルーズ・精神病理』という本を読んだ。俺が苦しいのは、「一続きの存在」から脱却していないからだ。過去があって今の俺があるのだが、俺がいかにも運動神経の鈍いやつと思われていたのは遠い、遠い過去。今の俺はその頃の俺とは繋がりが無いんだと思ってしまうえば、ラグビー体形のマッチョな初老おじさんなのだ。

Facebookで繋がっている人たちも、身内を除けば、一番古くから知っている友人は伊藤公雄さんだから、年賀状のやり取りを始めたのが29歳、実際にお会いしたのが34歳。そ

れ以前知り合いだった人とは繋がっていないし、これからもないだろう。俺の新しい人生は 29 歳から始まったと考えれば、俺はまだ 26 歳だ。

4. 母が京都に来た

8 月の上旬、母が久々に京都にやってきた。京都駅で待ち合わせした。写真で見るとまだ若く、見えていたのだが、京都駅で久しぶりに見た後ろ姿は老けていた。母は 81 歳だから仕方がない。普通の 81 の人に比べれば、まだ元気なのだ。頭もボケていない。しかし、もう流石に脚はあまり動かなくなっていて、「京都はもう来ることできないかも知れないから、あなたがこれからは帰ってこなきゃ」と言われた。

母が俺のところに滞在したのは二泊三日。しかも今回は暑い盛りだったので、どこかに観光に行くということはなく、母は俺の部屋を黙々と掃除していた。「だいぶ整理はするようになったわね」と言ってくれた。俺は昔は想像を絶するくらい散らかしていたが、今はそこまでない。俺の男友達は皆、掃除ができる人なので、それに影響されて、ある程度は綺麗好きになった。心が落ち着いてきたせいもあるだろう。大学の頃の汚い部屋は、俺の心のメタファーだ。あの頃は全てが上手くいなくて、もがきにもがき苦しんでいた。結果、掃除する集中力すらなかったのだ。母はお風呂やキッチンなど、普段俺がおろそかにしているところを細かく掃除してくれた。

母は、俺と苦勞を共にしてくれた人だ。弟にも相当な迷惑をかけた。しかし、「もう皆気にしていないから大丈夫よ」と母は言ってく

れる。あの当時の俺は、自分のトラウマをどうすることもできず、家族に八つ当たりしていた。それが今だいぶ落ち着いてきて、八つ当たりしていた自分を後悔するようになってしまっている。心の中に蘇ってくる辛い日々は、今更どうすることもできないものばかりだ。過去は変えられない、自分の性格は変わらない、世の中も変わらない。もう 55 歳だし、これから社会的栄光を掴むなんてこともないはずだ。

とは言っても、今の生活に何か不満があるわけではない。俺は愚痴ばかり言っているが、俺の友人からは、「國友さんは、愚痴愚痴言っているけど、もう乗り越えているから。トラウマを乗り越えていない人だったら、他人に愚痴することもできないですよ」と言われた。確かにその通りなのだ。自画自賛するみたいだが、俺は愚痴るのが取り柄だと言われる。俺は愚痴っていても、それが持ち味になってしまっている。そういうキャラが周りに定着してしまっていて、話しやすい、キャラ立ちしていると言われる。実際、今の俺は付き合ってくれる友達はたくさんいる。自己啓発本を読んでいると、「愚痴る人は嫌われる」と書かれているが、それは必ずしも当たっていない。俺は周りに愚痴をこぼすようになってから友達が大幅に増えたのだ。自分の弱さや悩みを隠さなくなってから、自然と友達ができるようになった。自分で自分を受け入れられるようになってくると、他人も受け入れてくれるようになるのだ。

ただ、今俺が悩んでいることは将来の目標が見えないこと。若い時も、将来の展望が見えない頃は辛かった。しかし、若い頃は、まだまだ時間はある、突然良いことが起きる可

能性もある、これから何か新たな人生が開けるという一筋の幻想があった。それが 55 歳になると、世の中のことも人生のこともあらかたわかってきて、これからの人生で得るものなんてあるのかという気持ちになるのだ。

自殺したいとは思っていない。映画を観たり、外食をしたり、プールに行ったり、小さな喜びや発見は日々の生活の中にある。でも、これが後 20 年延々と繰り返されて行くのか、そう思うとあまり晴れやかな気持ちにはならない。

「まだ 55 なんだから、これからよ」と母からは言われる。母は 60 くらいまでは苦労ばかりの人生だったが、60 過ぎてから人生が開けて、それまで行ったこともなかった海外にもあちこち出かけて行って、晩年になるごとに幸せが増しているように見えた。とりわけ、ここ数年は借金もなくなったので、本当にのんびりしている。苦労かけたけれど、終わりよければ全てよし。母は 80 を過ぎて、とても満ち足りていて、自分の人生を後悔していない、死ぬこともそれほど恐れていないようだった。「死ぬときのことを心配するんじゃなくて、生きている間をちゃんと生きていればいいのよ」と母は言う。

前号で、この頃周りの人が次々と亡くなるという話を書いた。その後、またいくつか訃報が入った。しかも、そのうちの一人は俺よりも若い人で、突然の死だった。俺もいつ死がやってくるかはわからない。しかし、それを不安に思っても意味はないのだ。死後の世界のことなんて誰にも本当にはわからないわけだから、それが来る日まで、死は永遠にこないんだという気持ちで日々を生きていくしかない。

「もうしたいことは全てしたから、今更したいことはないんだ」と俺が言うと、「家庭と恋愛だけは知らずに一生を終えるのよね (笑)」と母からは言われた。

確かに、家庭と恋愛だけはできそうにもない。でも、そのことに俺は不満を持っていない。俺は、その方が幸せなのだ。1 ヶ月ほど前にある先生から言われたことを思い出した。

「幸せだからこそ、死ぬのが怖いんじゃないの？」

「老後は不幸になった方がいいのかも、死ぬのが怖く無くなるから」と俺は答えた。

「その考えは贅沢だよ (笑)」とその先生。

思えば、この先生との出会いも俺にとっては運命的だった。神様が用意してくれるお計らいは俺の人生にはたくさんあったのだった。

5. 男になりたい、だけど、ジェンダーに反発する

7 月のある日、俺は電車に乗ってふっとスマホを見た。メッセージだ。「國友さん、実は退職しました。これから時間ができるので、今度こそ、どこかに遊びに行きましょう」と書かれていた。

行きつけのカフェの男性である。彼はこのカフェで、もう 10 年くらい前、彼が大学生だった頃からバイトをしている。細マッチョで、おしゃれで、イケメンで、ワイルドさと優しさを兼ね備えた人で、俺はずっと憧れていた。

この人は俺のことを男の一員として見なしてくれる。だから、俺の方も彼には男モードで接することができる。俺よりも 20 歳以上若いのだが、6 年ほど前に一緒に川遊びに行ったことは今でも楽しい思い出だ。「また、あの

時みたいに川遊びに行っ、二人で上半身裸の写真撮りましょう (笑)」と返事した。6年前に彼と上裸で一緒に撮った写真はマッチョっぽく撮れていて、俺は大事に保存している。

俺はこういう男同士の男っぽい付き合いを若い時にしたかった。しかし、それを実現するのに膨大な時間がかかって、結局、50くらいになって実現した。50になって実現する日が来るのだとわかっていたら、若い頃の俺はあそこまで荒れていなかった。しかし、当時の俺は、若い貴重な時間を楽しむことをしておかなくては、一生できないんだという強迫観念に囚われていた。だから、周りに取り残されていく自分が悲しくて、毎日が苦しくて、家族に当たり散らしていたのだった。

その後、8月になって、彼の新しい職場であるレストランに食事をしに行った。以前と変わらず、彼は対等に男として迎えてくれた。これからまた川遊びに行けるかどうかはわからないが、彼との繋がりには消えないことがわかった。少なくともこの人は俺のことを男として認めてくれている。もっと自信を持たなくては！俺は男なんだ！！

その一方で、俺は男を強制されることに激しい反発をしてしまう。

先日、SNSで繋がっているある男性が、次のようなことを投稿されていた。「重い物を持たなきゃいけないから男手がいる」と言ったら、「男手」という言葉は差別だと怒られた、こんなことまで差別なのかと。それに対して、その男性の友人の男性が、「そのうち、レディファーストまで性差別になっちゃいますよね」と賛同のコメントを書いていた。

俺は、思わず、横レスしてしまった。「ジェンダーの世界では、レディファーストも男手

も、主人も奥さんも全て禁句です。ジェンダー規範にセンサティブな人からすれば問題ありの表現なんですよ」と。

その男性は俺よりも若い。男尊女卑的な、古いタイプの男性ではないのだが、ジェンダーの部分には全く囚われずにここまで生きてこられたのだなあと思ったものだった。レディファーストは言うてはいけない言葉なのだという事は30年以上前から言われている。俺は死んでもレディファーストなんてするのは嫌だ。

俺は別にその先生を咎めるつもりはない。むしろ、ジェンダーブラインドで中年まで生きてこれた人たちは幸せな人だと思う。俺は小学生の頃にジェンダーに囚われてしまったから、そのあとの人生、いつだって、どこか居心地が悪いのである。

そうだ！ アメリカへの旅が俺を変えてくれるかもしれない。カルチャーショックで頭がしばらくはボーッとするはずなので、その時に心をリニューアルしようと思う。

絶望的な観測をしてしまう心配癖はなかなか治らない。サイトで読んだのが強迫的な心配性は何から何まで自分でコントロールできている人に起きるらしい。想定外のことには必ず起きるので、運命を信頼することをしなければ、いつまでたっても心配性は治らない。俺は自分は他力本願だと思っていたが、実際には自力本願過ぎるのである。もっと自分を甘やかして、神様にお任せしなくては、そのためにもキリスト教を学びたいと思うのだった。

楽になれるのならば、キリスト教でも仏教でもどちらでもいいのだけれど、俺はアメリカの文学や映画についてずっと学んできたか

ら、キリスト教の方が自分のアイデンティティに相応しいのではないかと思うのだった。

6. 『天気の子』(新海誠監督・2019)

家出少年の話である。俺はこの年頃の時にちょうど不登校だったが、この主人公は家出して、田舎から東京に出る。そこである健気な女の子と出会う。彼女は晴れ女なのだ。

この年頃に人生に迷い、学校に行かなくなるという部分では主人公と俺は似ている。共感したが、昔と今では確実に違っているだろう。俺の人生と強引に結び付けられない方がいいかと思った。

今の大学生たちと話しているとどういふ恋愛観を持っているのかわからない。昔に比べると彼氏や彼女がいるという子は確実に多いように思えるのだが、その一方で恋愛経験がないという子も増えていると聞く。

そもそも、彼らを見ていると、彼氏・彼女と普通の友達の間での線引きがどこにあるのかがよくわからない。この映画でも二人が仲良くなっていくものの、性的な場面は皆無である。言うまでもなく、この映画は、社会現象ともなった『君の名は』の新海誠監督なので、若い子のメンタリティに響く部分があるのだろうが、今の若い子たちは性を重視していないのだろうか。

Netflix で、前から楽しみにしていた山田孝之主演の『全裸監督』の配信が始まった。AV監督の村西とおるをモデルにした映画で、80年代には有名だった黒木香も登場する。業界の内幕を描くドラマとして、とても面白いのだが、これは80年代の話だ。今の若い子たちからすれば、両親よりも上の世代の青春時代

を見ているような気分なのだろう。俺たちの両親よりも上の世代となれば、それこそ第二次大戦を経験している世代なわけで、俺は若い頃世代の断絶を感じていたものだった。もう俺がトラウマを受けた時期は、今の若者たちにとっては完全に彼らが生まれる前の断絶した時代のことなのである。

深田晃司監督の新作『よこがお』という映画も見したが、ここではヒロインの付き合っている男性が男手ひとつで男の子を育てている設定になっていて、美味しそうな料理を作っていて、二人に食べさせる食卓の場面が出てくる。こういうお父さんもこの頃はいるのだろう。Amazon プライムの配信で『潤一』というドラマの最初のエピソードを見たが、このドラマは志尊淳のヌードが話題だ。男もエステやシェイプアップをすることは当たり前になってきている。80年代から考えれば隔世の思いである。

俺はもう歳だ。俺は古いのだ。これからは、もう一度若返った気持ちで、今の若い子の感覚を探りながら生きてみようか。そうすれば、過去のトラウマも生まれる前の出来事として、自分と切り離すことができるのではないか。

アメリカ旅行がその転機になってくれたらなあー。アメリカに fingers crossed (祈りを込めて) です笑。